

大学キャンプ実習が「社会人基礎力」に及ぼす有効性の検討

築山 泰典¹⁾ 神野 賢治¹⁾ 田中 忠道¹⁾

Examination of effectiveness that university camp causes
for “syakaijin-kisoryoku (Social basic ability)”

Yasunori TSUKIYAMA¹⁾ Kenji KAMINO¹⁾ Tadamichi TANAKA¹⁾

Abstract

The promotion of “Syakaijin-kisoryoku (Social basic ability)” advocated by the Ministry of Economy Trade and Industry in 2006, is thought to be an important problem at the university. The purpose of this study was, the change by the camp experience was verified by using the standard that had been used of the outdoors education.

Actually, to the student who participated in the university camp causes of 143 students, The change before and after the camp was measured by using four standards (Self-Rating “Syakaijin-kisoryoku (Social basic ability)” scale Tri-axial Coping Scale 24 IKIRU CHIKARA (Zest of Living) scale and Self-Esteem scale).

The following results were obtained:

- 1) As for Coping style, the tendency toward direction of positive participation was shown.
- 2) Among 14 IKR scale items, up trend was admitted in ten items.
- 3) In the self-esteem potential scale, the tendency to face the effort principle was shown.
- 4) In the self-esteem potential scale, Confidence and the self-receipt showed the decrease tendency.
- 5) 46 people (32.2%) are recognizing that own Self-Rating Syakaijin-kisoryoku scale is high in the object person.
Result of doing analysis, separately for H-SAG (High-Social ability group) and N-SAG (Normal-Social ability group) from Self-Rating Syakaijin-kisoryoku scale,
- 6) The tendency to show a high score had been admitted compared with N as for Hbefore it camped.
- 7) The tendency to show a high score compared with N-SAG had been admitted as for H-SAG before they camped.
- 8) The ability guessed to be Syakaijin-kisoryoku has improved to N-SAG by the camp experience.

1) 福岡大学スポーツ科学部
Fukuoka University, Faculty of Sports and Health Science

1. 緒言

経済産業省は、団塊世代者の定年退職による産業人材の減少による2007年問題を背景とし、若手人材の確保・育成を重要な課題と捉え、2005年7月に「社会人基礎力に関する研究会」を設置した¹⁾。この会で協議された主たる対象者は、「大学進学率が5割に達する状況であること」より大学生とされる。その後、この研究会は8回の会合が持たれ、2006年1月には「社会人基礎力に関する研究会」中間取りまとめ²⁾が報告された。この中で、「職場や地域社会で活躍する上で必要となる能力」は、「基礎学力」と「専門的知識」とに関連付けた「社会人基礎力」によって示された(図1.)。そして、この社会人基礎力の能力要素として「前に踏み出す力(アクション)」、「考え抜く力(シンキング)」、「チームで働く力(チームワーク)」の3分類を示し(図2.)、それぞれ下位項目として3項目(主体性・働きかけ力・実行力)、3項目(課題発見力・計画力・創造力)、6項目(発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力・

規律性・ストレスコントロール力)を挙げている(表1)。これら社会人基礎力の育成が、大学教育に求められる今日的課題であると言える。

野外教育分野では、青少年に対する多様な教育的アプローチがなされており、大学生を対象とした研究報告もみられる。社会人基礎力は、新しい概念であるため、まだ直接的に測定された研究報告はないが、先に述べた下位項目に関連性を見出すことが出来る。例えば、“主体性”や“実行力”に関連があると思われるものに“自己概念”があり、その変化を捉えた「大学キャンプ実習が参加者に及ぼす効果」に関する研究においては、キャンプ経験後に自己概念の向上を認めたとして、川村ら³⁾、影山ら⁴⁾、遠藤ら⁵⁾、が報告している。また築山ら⁶⁾の研究では、自己概念の向上がセルフエフィカシーの向上につながり、結果として性格傾向のうち「抑うつ傾向の低下」、「客観性の向上」、「思考的外交性の向上」を変化させるとの報告もあり、このことは社会人基礎力に示される「チームワーク」とに関連性があるものと推測される。また、キャンプの持つ矯正作用を検討する

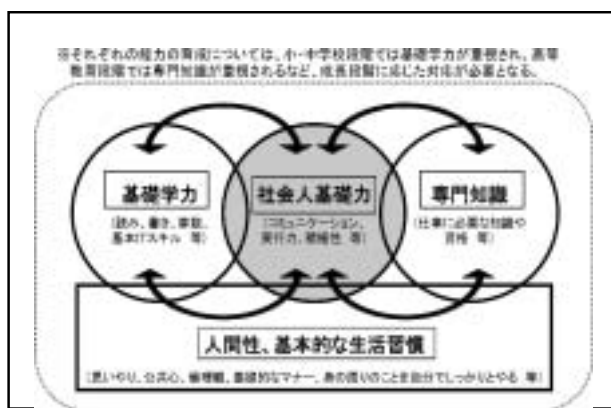


図1. 職場や地域社会で活躍する上で必要となる能力について



図2. 社会人基礎力の3つの能力

表1. 社会人基礎力の能力要素

分類	能力要素	内容
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に意欲を持ち行動力 (例) 自身の役割や責任を自覚し、自ら率先行動して積極的に取り組む。
	働きかけ力	他人に働きかけ働きかけ力 (例) 自ら率先行動して周囲に働きかけ、目的を達成しようとする。
	実行力	目的を設定し確実に行動する力 (例) 決められたことに取り組むだけでなく自ら目標を設定し、進捗を把握して行動し、取り組む。
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	状況を分析し目的や課題を明らかにする力 (例) 状況を把握し、自らの役割や責任を把握し、課題を明確に設定する。
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし、準備する力 (例) 課題の解決に向けた適切なプロセスを明らかにし、その中で必要なものは何かを把握し、それに取り組む。
	創造力	新しい価値を生み出す力 (例) 現状を打破しようとする、創造的に新しい解決策を考える。
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力 (例) 自分の意見をわかりやすく伝え、相手に理解してもらおうとする。
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力 (例) 相手の意見や意見を聞き、適切なフィードバックを適切に行う。
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力 (例) 自分のルールや方法に固執するのではなく、相手の意見や立場を理解し、柔軟に対応する。
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 (例) チームで仕事をすると、自分がどのような役割を担うべきかを理解する。
	規律性	社会のルールや人の規範を守る力 (例) 就業規則など、社会のルールや規範に従って自分の行動や言動を適切に行う。
ストレスコントロール力	ストレスの発生に対応する力 (例) ストレスの原因を認識し、自身の働き方や生活スタイルを見直し、ストレスに対応する。	

ものとしては、タイプA・B特性に対する検討として遠藤ら⁷⁾の研究もあり、ここではタイプBをタイプA方向へ、すなわち、「無気力傾向の学生」が、「短時間にできるだけ多くのことを成し遂げようとする努力を絶え間なく、必要とあれば他人に対抗してでもむきになって、続ける人に見られる行動と感情の集合体」の方向に変化するとその行動変容を示す結果を示しており、「主体性」、「発信力」などの項目との関連も考えられる。

一般的に、キャンプ活動はそこでの生活活動全てが、日常生活とは全く異なる非日常的空間での生活であることから、その生活に適応すること自体を「ストレスへの適応」と解釈することも出来る⁸⁾。その点で、ストレス現象に対して対象者を小中学生としているが、ラザルスらの心理的ストレス理論を用いた西田ら⁹⁾の研究において、キャンプ経験に非好意的な認知評価を持つ児童の感情に変化を及ぼす影響を示した上で、「ストレス反応の効果に、認知的評価が影響を及ぼしている可能性」を示唆している。また、特にソーシャルサポートそしてストレス対処行動（コーピング）に着目した中川ら¹⁰⁾の研究では、キャンプ中の活動における様々な成功体験がポジティブなストレス対処行動につながることを示している。このことは、社会人基礎力におけるチームワークの下位項目として示されている「ストレスコントロール力」に関連性を見出すものである。

この「社会人基礎力」といった表現で大学教育に求められる状況と、過去の小・中学校における「生きる力」育成の必要性が高まった状況とに、対象者の年齢は異なるものの、それぞれの発育段階に応じた社会技能（ソーシャル・スキル）を求めている点では、類似性を感じる。具体的には1996年、第15期中央教育審議会第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」により、「ゆとり教育」と「生きる力」をはぐくむことの重要性が示され、その具体的手法として生活体験・自然体験・社会体験などの体験学習の必要性が挙げられたことである。その後、学力低下の問題などから、2007年11月の中央教育審議会 初等中等

教育分科会教育課程部会発行の「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」によると、授業時間の確保による学力向上を目的とし、ゆとり教育の見直しを図る一方で、「生きる力」については、その理念の共有化を盛り込み、現状より積極的展開が示されている¹¹⁾。

野外教育の分野において、橘ら¹²⁾は、自然体験事業の評価を目的としながら、「生きる力」の構成概念を明らかにするために「生きる力を構成する指標」を示し、その後「IKR評定用紙」を作成し、長期自然体験活動が子どもの生きる力向上に有効であるとした¹³⁾。

以上の観点より、野外教育分野で過去の研究で用いられてきた研究手法を用い、「社会人基礎力」を形成する内容・項目を包括的に捉え、キャンプ経験が社会人基礎力に及ぼす影響を測定することは今日の大学教育課題としての社会人基礎力育成に対する具体策の一手法であると考え、本研究の主たる目的とする。

2. 方法

2.1. 被験者

2006年8月28日～31日及び同年9月4日～7日に、前・後段と二期に分けて3年次生を対象に実施された、福岡大学スポーツ科学部キャンプ実習に参加した学生189名（男性136名、女性53名）である。尚、実施プログラムは、前・後段と同様のものである。

2.2. キャンプの概要

本キャンプ実習は、大分県玖珠郡九重町のやまなみ荘キャンプ場で3泊4日の日程で実施され、目的として1)野外での生活体験を通じて共同の精神を養う、2)キャンプにおける必要な技術を習得する、3)自然への理解を深める、4)野外教育の指導者に必要な資質を向上すること、の4点を挙げている。また、宿泊は全てテント泊であり、食事も全て自炊により実施した。

班編成については、クラブ活動や所属ゼミが異

なる者で1班8～9名の男女混合とし、前段11班、後段12班の構成とした。キャンプの運営指導に関しては、前段7名、後段9名の福岡大学スポーツ科学部教員があたり、うち3名は両段ともに関わり2つのキャンプ運営・活動が同様に実施されるよう配慮した。組織キャンプにおいては、各班に担当のキャンプカウンセラーを配置することが一般的であるが、指導者養成の観点からも、各班の班長にその役割を任せる形式とした。また、班長以外にも班員全員に何らかの役割を持たせる運営形式を採った。

キャンププログラムは、初日にロープワーク等の講習を経て、テント設営やカマド作り等のサイト設営を行い、2日目にグループの機能性を高めるプログラムとして班で冒険的な要素を含む課題を解決していくイニシアティブゲームを実施、その後読図、コンパスワークの講習を開催した。3日目にはメインプログラムとして設定した沢登りとスタンプ発表を含むキャンプファイヤーを行った。最終日は、撤収作業の後、30分程度の1人で過ごす「ソロの時間」を設定し、個人としてのふりかえりの時とした。また、毎夜には班別ミーティ

ングとして班長を中心に各班でふりかえり活動を実施した(表2.)。

2.3. 検査及び手続き

2.3.1. 自己評価による社会人基礎力

社会人基礎力によって示される12項目に対して「自分に力がある(自信がある)」と考える場合は“ ”を、「普通」と考える場合は“空欄のまま”に、そして「自分に力がない(自信がない)」と考える場合は“×”を記入させる3件法でキャンプ実施前に自己評価させた。

2.3.2. コーピング検査

ストレスコントロール力を捉えるために、神村らが開発した¹⁴⁾ Tri-axial Coping Scale 24 (TAC-24) を用いた。これは、ストレス対処行動としての個人のコーピングスタイルを「問題焦点あるいは情動焦点」、「関与あるいは回避」、「認知系機能あるいは行動系機能」という3次元から、1)情報収集 2)計画立案 3)カタルシス 4)肯定的解釈 5)責任転嫁 6)放棄・諦め 7)気晴らし 8)回避的思考の8象限で捉えることが出来る24項目からなる質問紙である。これら、項目に対して「1: そのようにした(考えた)ことはこれまでない」から「5: いつもそのようにしてきた(考えてきた)」の5件法で回答するものである。1つの象限は3項目の合計点で評価することから、3-15点の範囲で示されることになる。

2.3.3. 生きる力検査

キャンプが社会技能(ソーシャル・スキル)向上に及ぼす影響を測定する尺度として、橘らによって開発された「IKR (IKiRu chikara) 評定尺度」を使用した。この調査用紙は、小・中学生用に開発された質問紙であるため、合計点である生きる力得点は用いず、指標による比較検討を行うことを目的とし使用することを、先に述べておきたい。この質問紙は、1)非依存 2)積極性 3)明朗性 4)交友・協調 5)現実肯定 6)視野・判断 7)適応行動 8)自己規制 9)自然への関心 10)真面目

表 - 2. キャンププログラム概要

	1日目	2日目	3日目	4日目
時刻				
6:00		起床 朝の集い (デニスコート)	起床 朝食 (カレーメン)	起床 朝の集い 朝食作り フレンチトースト
7:00		朝食作り オープンサンド & 昼食お弁当作り		
8:00				班別片付け終了 ソロの時間(30分程度)
9:00	集合(二記念画像前) 点呼		沢登り説明	
10:00	バス出発	イニシアティブゲーム 説明 イニシアティブゲーム開始	沢登り用意 沢登りスタート (準備の出来た班から)	閉校式 バス発
11:00				
12:00	休憩・昼食	昼食		バス大学着
13:00	やまなみ荘着 開校式	終了		
14:00	サバイバルテクニク1 (ロープワーク)	サバイバルテクニク2 (読図・コンパスワーク)	キャンプ場 着	
15:00	サイト作り		キャンプファイヤー説明	
16:00	テント、タープ、かまど	終了		
17:00	(食材・調理器具、ナタの説明) 夕食作り(カレーライス・サラダ)	夕食作り 炊き込みご飯 豚汁	夕食作り シチュー 鶏の照り焼き	
18:00				
19:00	班別の時間 (随時入浴)	班別の時間	スタンプ発表 キャンプファイヤー	
20:00	やまなみの集い (ボンファイヤー) ※その後班別の時間			
21:00				
22:00	カウンセラー(班長) ミーティング スタッフミーティング	班の時間 (振り返り)	班の時間 (振り返り)	

勤勉 11) 思いやり 12) 日常的行動 13) 身体的耐性 14) 野外生活・技能の14指標を示すことが出来る70項目からなる質問紙である。それぞれの項目に対し「6：とてもよくあてはまる」から「1：まったくあてはまらない」までの6件法で回答するものである。それぞれの指標は5項目の合計点で評価することから、5 - 30点の範囲で示されることとなる。

2.3.4. 自己成長性検査

自己概念を測定する尺度としては、一般的に用いられることが多い、「自己成長性検査」を用いる。この作者でもある梶田¹⁵⁾¹⁶⁾によれば、自己成長とは、「自己形成ないし自己実現に関する態度や意欲」に関する自己意識としている。この尺度は31項目からなり、それぞれの項目に対し、「5：非常にあてはまる」から「1：全くあてはまらない」の5件法で回答するものである。また、この尺度は、達成動機（8項目）努力主義（9項目）自信と自己受容（8項目）他者のまなざしの意識（8項目）の4軸（因子）から構成され、各軸に重複する項目もあるため4軸に示した数の和は33項目となる。この時、1項目については重複項目である上、一方は逆転項目として計算する必要があるため、合計点はこの4因子の点数を合計して算出し、31点から161点の範囲となる。

2.3.5. 検査の手続き

キャンプ前（PRE）の調査は、8月上旬に実施した事前ガイダンス時に集団調査法にて実施した。また、キャンプ後（POST）に関しては、キャンプ実習最終日の閉校式前に集団調査法にて実施した。尚、自己評価による社会人基礎力調査は、キャンプ前（PRE）のみの実施し、他の検査尺度はキャンプ前後に調査を実施した。

2.3.6. 統計処理

得られたデータはエス・ピー・エス・エス社のSPSS10.0JforWindowsを用いて、対応のある平

均値の差の検定及び対応のない平均値の検定（共にt検定）を行った。尚、統計的有意水準は5%を用いた。

3. 結果

3.1. 回収率

キャンプ参加者189名に対し調査を行ったが、1)事前のガイダンスに参加せずに調査できなかった者、2)回答内容に欠落する項目が多かった者など、存在したため回収率は75.7%（143名；男性：101名、女性：42名）であった。

3.2. 自己評価による社会人基礎力

キャンプ実施前に、経済産業省が示した社会人基礎力12項目に対して「自分に力がある（自信がある）」と答えた者の割合と、「自分に力がない（自信がない）」と答えた者の割合を示した（図3）。この時、「ある」との回答割合が60%以上を示す高い項目は、「規律性（79.7%）」、「傾聴力（74.8%）」、「柔軟性（65.7%）」、「主体性（61.5%）」、「情況把握力（60.8%）」の5項目であった。また、「ない」との回答割合は、全体的に低い結果であったが、20%以上を示した項目は、「発信力（35.0%）」、「創造力（34.3%）」、「働きかけ力（32.2%）」、「ストレスコントロール力（26.6%）」、「計画力（22.4%）」の5項目であった。

また、12項目のうち「力がある」と回答した項目数は5項目が最頻値を示している（図4.）。一方で、「力がない」と回答した項目数は0項目が最頻値を示している（図5.）。全体的に社会人基礎力に示された項目に対して、「力がある（自信がある）」とする自己評価の高さが認められる。

3.3. コーピング尺度

コーピング尺度において、8領域ごとにキャンプ前後（Pre-Post）での平均値及び標準偏差を示し、t検定を行った（表3.）。この時、「カタルシス」（ $t=-2.42$; $p<.05$ ）、「気晴らし」（ $t=-3.94$;

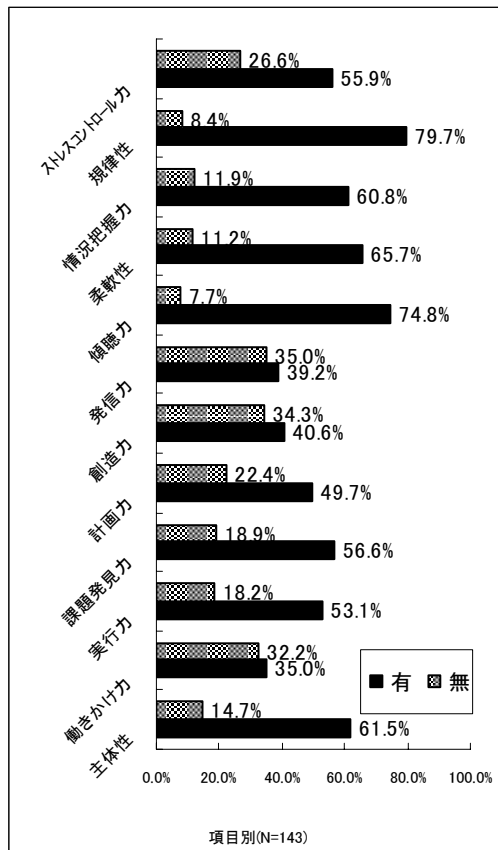


図 3. 社会人の基礎力自己評価

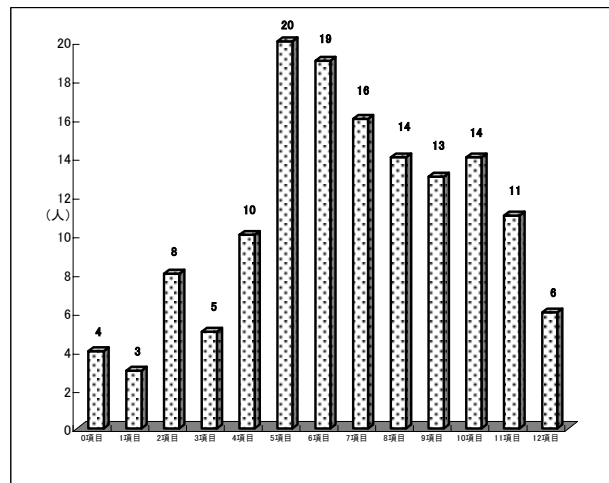


図 4. 項目別「あり」との回答数

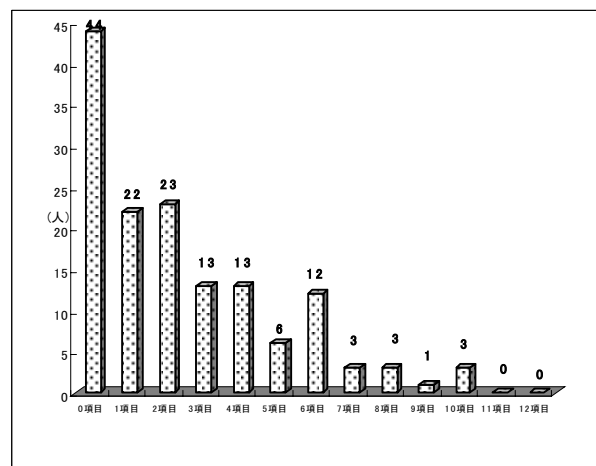


図 5. 項目別「なし」との回答数

p<.001)、「肯定的解釈」(t=-2.11; p<.05)、「計画立案」(t=-2.09; p<.05) に有意な向上が認められ、「放棄・諦め」に有意傾向が認められた (t=-3.94; p<.1)。これらの、有意な向上が認められた4項目が示すコーピングスタイルとして、「カタルシスは「関与・問題焦点・行動」に、「気晴らしは「回避・情動焦点・行動」に、「肯定的解釈は「関与・情動焦点・認知」に、「計画立案は「関与・問題焦点・認知」のそれぞれ向かう傾向が挙げられる。この時、コーピングスタイルとしての、善し悪しを判断は出来ないが¹⁷⁾、「回避と関与」を比較した場合、「関与」のほうが積極的コーピングスタイルと解釈できる。そのため、キャンプ経験により参加者は、ストレスに対する行動として、「積極的なコーピングスタイルを取る傾向」に向かうとの結果が示された。

表 3. コーピング尺度変化

N=143	pre	post	t-value
	M (SD)	M (SD)	
カタルシス	10.03 (2.57)	10.45 (2.50)	-2.42 *
放棄・諦め	7.00 (2.18)	7.34 (2.65)	-1.93 †
情報収集	10.63 (2.29)	10.87 (2.34)	-1.47
気晴らし	10.9 (2.17)	11.52 (2.28)	-3.94 ***
回避的思考	9.13 (2.30)	9.44 (2.30)	-1.58
肯定的解釈	10.99 (2.22)	11.32 (2.14)	-2.11 *
計画立案	10.43 (2.19)	10.78 (2.23)	-2.09 *
責任転嫁	5.99 (2.20)	6.21 (2.48)	-1.36

***p<.001,*p<.05,†p<.1

3.4. 生きる力

IKR が示す14指標ごとに平均値及び標準偏差を示し、キャンプ前後 (Pre-Post) での t 検定を行った (表 4)。この時、「非依存」(t=-3.67; p<.001)、「積極性」(t=-2.17; p<.05)、「明朗性」(t=-2.10; p<.05)、「交友・協調」(t=-2.50; p<.05)、

表 4. IKR14項目の変化

N=143	pre		post		t-value
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	
非依存	19.36 (3.84)	20.64 (4.49)	-3.67	***	
積極性	20.87 (4.32)	21.76 (4.69)	-2.17	*	
明朗性	19.75 (4.41)	20.55 (4.58)	-2.10	*	
交友・協調	20.01 (4.31)	20.92 (4.45)	-2.50	*	
現実肯定	22.14 (5.07)	22.93 (5.24)	-1.62		
視野・判断	19.67 (3.95)	20.54 (4.49)	-2.28	*	
適応行動	21.87 (4.78)	22.57 (4.79)	-1.57		
自己規制	19.67 (4.18)	20.33 (4.13)	-1.80	†	
自然への関心	20.59 (4.42)	20.92 (4.73)	-0.78		
真面目勤勉	22.09 (5.26)	23.04 (5.06)	-1.85	†	
思いやり	21.57 (4.31)	21.99 (4.85)	-0.91		
日常的行動	19.84 (4.43)	21.00 (4.56)	-2.86	**	
身体的耐性	20.52 (4.51)	21.35 (4.68)	-1.94	†	
野外生活技能	19.05 (4.52)	20.16 (4.06)	-3.00	**	

***p<.001,**p<.01,*p<.05,†p<.1

「視野・判断」(t=-2.28; p<.05)、「日常的行動」(t=-2.86; p<.05)、「野外生活技能」(t=-3.00; p<.01)の7項目についてキャンブ経験後に有意な向上が認められた。また、「自己規制」(t=-1.80; p<.1)、「真面目勤勉」(t=-1.85; p<.1)、「身体的耐性」(t=-1.94; p<.1)の3項目に関して有意傾向としての向上が認められ、14項目中10項目に関して顕著な向上が認められた。この時、変化が認められなかった4項目のうち「現実肯定」「適応行動」「思いやり」の3項目はキャンブ前の得点がそれぞれ22.14点、21.87点、21.57点と高い点数を示している。そのため、変化しにくい値である「天井値」に近い状態であり向上の余地がなかったと推測できる。

3.5. 自己成長性

自己成長性尺度が示す、4指標ごとに平均値及び標準偏差を示し、キャンブ前後 (Pre Post) でt検定を行った (表5)。「努力主義」において有意な向上が認められた (t=-3.58; p<.001)。しかし、「自信・自己受容」に関しては、有意な低

表 5. 自己成長性尺度の変化

N=143	pre		post		t-value
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	
達成動機	28.45 (4.15)	28.85 (4.44)	-1.39		
努力主義	30.27 (3.33)	31.26 (3.94)	-3.58	***	
自信・自己受容	22.96 (4.09)	22.26 (4.55)	2.46	*	
他者のまなざし意識	26.24 (4.47)	26.24 (5.02)	-0.03		

***p<.001,*p<.05

下が示される結果となった (t=2.46; p<.05)。

4. 考察

4.1. 社会人基礎力に対する自己評価

平成18年4月に経済産業省より発行された「社会人基礎力に関する緊急調査」の中に参考資料として、「企業が求める人材像と若者の認識とのギャップ」を示したものがある¹⁸⁾。これは、企業に関するデータについては、経済産業省調査によって東証一部上場企業を対象に調査されたデータ(「求める人材」N=158、「若手社員に不足が見られる能力」N=211)であり、一方の若者に関するデータは、みんなの就職株式会社「社会人基礎力に関するアンケート」からの出典とされる、2006年卒、2007年卒の学生(主に大学3年生/4年生および、大学院1年生、2年生)3127名を対象としたものである(図6.)。この結果として、大手企業が求める人材像と若者が強みと感じている能力との間に、「主体性」、「実行力」、「課題発見力」の3項目で特にギャップが大きいことが示されている。また若手社員に、不足が見られると企業が考える能力と、若者が弱みに感じている能力の間では、「主体性」や「課題発見力」で特にギャップが大きいことが示されている。これら項目が具体的に大学教育に求められる育成課題であると考えられる。

ここで、示された全国調査の結果と今回の調査対象者が示した、社会人基礎力に関する結果とを項目ごとの比較を行うと、本研究の対象における「自信があると回答している者の割合の高さ」が見てとれる(図7.)。特に、企業が若者に求める社会人基礎力として、高い必要性を示す「主体性」「実行力」「課題発見力」に関して、全国平均との比較(全国/対象者)で、「主体性」は、28.9%/61.5%、「実行力」は35.3%/53.3%、そして「課題発見力」は39.3%/56.5%と、いずれの項目においても、過半数の者が「力がある」と回答し全国調査を大きく上回っている。

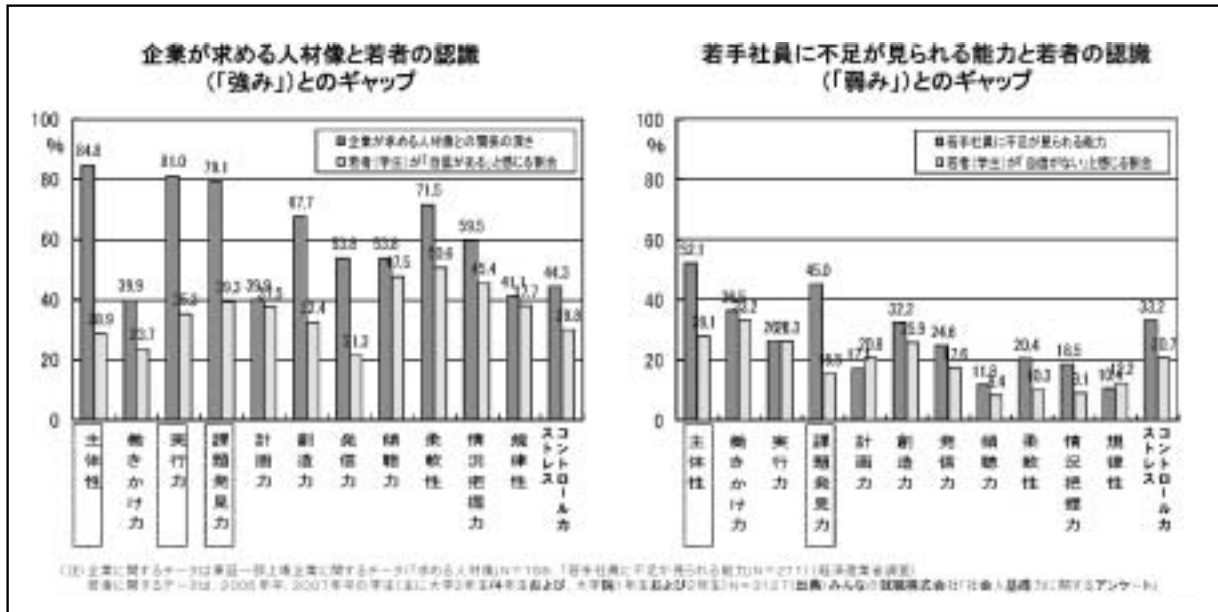


図 6. 企業が求める人材像と若者の認識とのギャップ

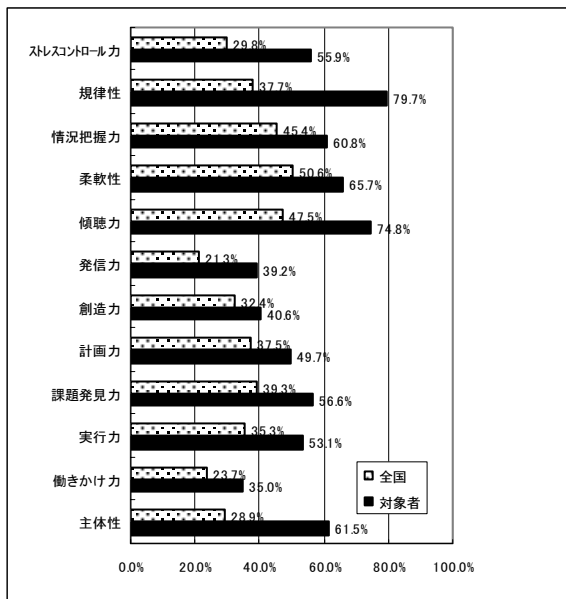


図 7. 社会人基礎力項目別「あり」回答割合 (全国値と対象者との比較)

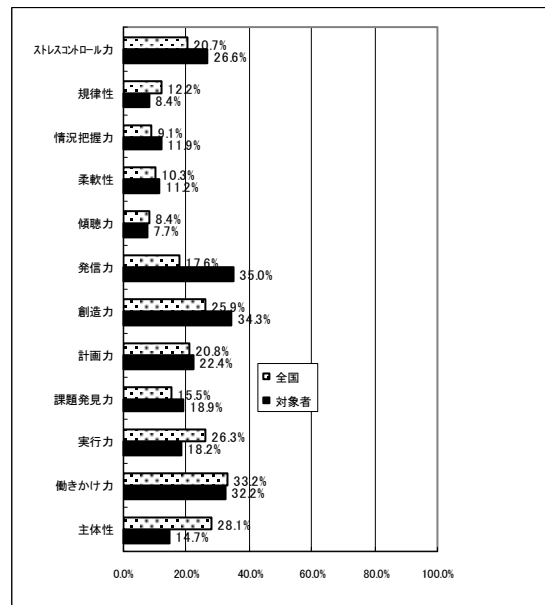


図 8. 社会人基礎力項目別「なし」回答割合 (全国値と対象者との比較)

一方、これら項目に対して「力がない(自信がない)」と回答している者の割合を比較すると、「力がある」と回答した割合の分布よりも、全国調査の結果に近い様相を示している(図 8.)。しかし、その中に差異を見出すなら、全国調査データと10%以上の違いが見られる項目として、「主体性」については、全国調査では28.1%と高い割合を示しているのに対し、本研究の対象者は14.7

%と低い割合を示す。また、「発信力」に関しては全国調査では17.6%に対し、本研究対象者は35.0%となっており、本研究の対象者の特性として「発信力に対する苦手意識」が示される。

本研究における社会人基礎力に関する結果では、能力が「ない」よりも「ある」とする者の割合が高い傾向を示している。また選択した項目数別に「あり」「なし」の回答数を比較すると、「あり」

は5項目選択している者が20名(14.0%)と最頻値を示すが、過半数の7項目以上を選択している者は74名(51.7%)と過半数を示す(前出 図4.参照)。一方で、「なし」に関して同様に、回答数から検証すると、「力がないものはない」とする0項目が44名(30.8%)と最頻値を示す結果であり、2項目以下の回答者数は89名(62.2%)と高い割合を示している(前出 図4.参照)。

社会人基礎力に対して、自己評価させた結果から「力があるとする項目数7項目以上、力がないとする項目数は2項目以下と高肯定感回答者」は、47名で全体の32.9%存在した。これらの者を「自身に対する高い社会人基礎力認知群: High-Social Ability Group N=47」(以下: H-SAG と略す)とした。そして、「力があるとする項目数6項目以下、力がないとする項目数は3項目以上と一般的肯定感回答者」の対象者を「自身に対する一般的社会人基礎力認知群: Normal-Social Ability Group N=96」(以下: N-SAG 略す)とし、両群の比較検討を加えていきたい。

4.2. 自己評価による社会人基礎力高・低群比較

4.2.1. コーピング項目の比較検討

キャンブ事前調査における、コーピング項目の違いをH-SAGとN-SAGに分けて示す(表6.)。結果、H-SAGはN-SAGと比べ、「放棄・諦め」の低さ(t=-2.75; p<.01)、「計画立案」の高さ(t=2.89; p<.01)について有意な差が示され、「肯定的解釈」の高さにも有意傾向が示された(t=1.92; p<.1)。この結果から、H-SAGはN-SAGに比べ、日常的なコーピングスタイルとし

表 6. H-SAG と N-SAG のコーピング項目比較

	H-SAG M (SD) N=47	N-SAG M (SD) N=96	t-value	
カタルシス	10.02 (2.74)	10.03 (2.50)	-0.02	
放棄・諦め	6.30 (2.11)	7.34 (2.15)	-2.75	**
情報収集	10.66 (2.65)	10.61 (2.11)	0.10	
気晴らし	10.74 (2.45)	10.97 (2.02)	-0.58	
回避的思考	9.23 (2.53)	9.07 (2.19)	0.39	
肯定的解釈	11.49 (2.15)	10.74 (2.22)	1.92	†
計画立案	11.17 (2.00)	10.07 (2.19)	2.89	**
責任転嫁	5.70 (2.07)	6.14 (2.25)	-1.11	

**p<.01,†p<.1

て、目の前の困難な事柄に対して、「諦めたり放棄したりせずに、解決に向けた計画立案行動を取り、肯定的に前向きに解釈している」とのポジティブなスタイルを持つと考えられる。社会人基礎力に対する自己評価の相違が、実際のストレスに対するコーピングスタイルの違いにつながっていることが示された。

次に、キャンブ前後のコーピングスタイルの変化をH-SAGとN-SAGに分けて検討する。まず、H-SAGの特徴として、「気晴らし」の項目に有意な向上(t=-4.01; p<.001)が、「計画立案」に有意な向上傾向(t=-1.83; p<.1)がそれぞれ認められた(表7.)。計画立案に関しては、事前の結果でもN-SAGと比べ、高い傾向が認められたが、キャンブを通じてその傾向が強まることが示された。一方で、N-SAGについては、「カタルシス」(t=-3.46; p<.01)、「気晴らし」(t=-2.03; p<.05)、「回避的思考」(t=-2.11; p<.05)、「肯定的解釈」(t=-2.41; p<.05)に有意な向上が認められた(表8.)。

有意な差は認められなかったものの、得点の上下を考えるとH-SAGは「カタルシス」「回避的思考」の項目において低下が示され、N-SAGについては有意な向上が認められている。カタルシ

表 7. H-SAG のコーピング項目 キャンブ前後比較

H-SAG	Pre M(SD)	Post M(SD)	t-value
カタルシス	10.02 (2.74)	9.79 (2.78)	0.85
放棄・諦め	6.30 (2.11)	6.72 (2.56)	-1.54
情報収集	10.66 (2.65)	11.19 (2.50)	-1.58
気晴らし	10.74 (2.45)	11.87 (2.11)	-4.01 ***
回避的思考	9.23 (2.53)	9.13 (2.22)	0.32
肯定的解釈	11.49 (2.15)	11.60 (2.07)	-0.36
計画立案	11.17 (2.00)	11.60 (2.18)	-1.83 †
責任転嫁	5.7 (2.07)	5.79 (2.29)	-0.30

***p<.001,†p<.1

表 8. N-SAG のコーピング項目 キャンブ前後比較

N-SAG	Pre M(SD)	Post M(SD)	t-value
カタルシス	10.03 (2.50)	10.77 (2.29)	-3.46 **
放棄・諦め	7.34 (2.15)	7.65 (2.66)	-1.33
情報収集	10.61 (2.11)	10.72 (2.26)	-0.56
気晴らし	10.97 (2.02)	11.35 (2.35)	-2.03 *
回避的思考	9.07 (2.19)	9.59 (2.33)	-2.11 *
肯定的解釈	10.74 (2.22)	11.19 (2.18)	-2.41 *
計画立案	10.07 (2.19)	10.38 (2.16)	-1.39
責任転嫁	6.14 (2.25)	6.42 (2.55)	-1.45

**p<.01,*p<.05

スと回避的思考との関連性を考察すると、自身の主体性が関連するものと考え。すなわち、H-SAG は、より主体的傾向に近づき、N-SAG は主体的傾向が弱まる結果が示されたと解釈する。また、ここで、H-SAG および N-SAG とともに「気晴らし」に有意な向上が認められた結果から、スポーツを専門的に学び、日常的に関わる機会の多い対象者にとって、今回のキャンププログラムは冒険的要素が弱く、日常生活と比べストレス強度が低く、気晴らし的なものを感じられ、「リフレッシュ効果」につながったものと推測する。

また、コーピングスタイルに関して、H-SAG と N-SAG との間にキャンプ事前調査から及びキャンプ前後の比較から相違が認められ、H-SAG に対するコーピングスタイルのほうがポジティブに解釈しやすい傾向が認められたことは、社会人基礎力に対する自己評価結果の違いは、単なる自己認識に対する厳しさ・甘さの相違ではなく、自己に備わった「社会人基礎力」を正当に判断している様相が認められる。

4.2.2. 生きる力 (IKR) 項目の比較検討

キャンプ事前調査における、生きる力項目の違いを H-SAG と N-SAG に分けて示す (表 9)。ここでも、H-SAG が N-SAG と比べ、「非依存」(t=3.48; p<.01) 「積極性」(t=2.69; p<.01) 「明朗性」(t=1.99; p<.05) 「交友・協調」(t=2.55; p<.05) 「視野・判断」(t=3.33; p<.01) 「適応行動」

表 9. H-SAG と N-SAG の IKR 項目比較

N=143	H-SAG	N-SAG	t-value	
	M (SD) N=47	M (SD) N=96		
非依存	20.89 (4.53)	18.60 (3.23)	3.48	**
積極性	22.23 (4.74)	20.21 (3.96)	2.69	**
明朗性	20.79 (4.91)	19.24 (4.08)	1.99	*
交友・協調	21.30 (4.29)	19.38 (4.20)	2.55	*
現実肯定	23.11 (5.38)	21.67 (4.86)	1.61	
視野・判断	21.19 (4.15)	18.93 (3.65)	3.33	**
適応行動	23.40 (5.17)	21.13 (4.41)	2.74	**
自己規制	20.60 (4.21)	19.22 (4.11)	1.87	†
自然への関心	21.30 (5.40)	20.24 (3.84)	1.20	
真面目勤勉	23.00 (6.08)	21.65 (4.78)	1.45	
思いやり	22.49 (5.09)	21.11 (3.82)	1.81	†
日常的行動	20.77 (4.33)	19.39 (4.43)	1.76	†
身体的耐性	21.19 (4.83)	20.20 (4.33)	1.24	
野外生活技能	19.94 (4.73)	18.61 (4.37)	1.65	

**p<.01,*p<.05,†p<.1

(t=2.74; p<.01) において有意な高さを示し、「自己規制」(t=1.87; p<.1) 「思いやり」(t=1.81; p<.1) 「日常的行動」(t=1.76; p<.1) についても有意傾向が認められた。生きる力で示される項目を、社会人基礎力と直接的に関わっていると考えると、社会人基礎力を高く自己評価した対象者は、事実として、それら能力を身につけている傾向にあることが示された。

次に、キャンプ前後の生きる力項目の変化を H-SAG と N-SAG に分けて検討する。まず、H-SAG に関して、結果として全ての項目で有意な向上は認められず、キャンプ経験による変化は認められなかった (表 10.)。一方で、N-SAG については、「非依存」(t=-3.99; p<.001)、「積極性」(t=-2.14; p<.05)、「交友・協調」(t=-2.74; p<.01)、「

表 10. H-SAG の IKR14項目 キャンプ前後比較

H-SAG	Pre M (SD)	Post M (SD)	t-value	
非依存	20.89 (4.53)	21.66 (5.00)	-1.06	n.s.
積極性	22.23 (4.74)	23.21 (5.18)	-1.03	n.s.
明朗性	20.79 (4.91)	21.77 (4.97)	-1.28	n.s.
交友・協調	21.30 (4.29)	21.79 (4.83)	-0.65	n.s.
現実肯定	23.11 (5.38)	23.68 (5.60)	-0.58	n.s.
視野・判断	21.19 (4.15)	21.81 (4.79)	-0.69	n.s.
適応行動	23.40 (5.17)	23.74 (5.01)	-0.34	n.s.
自己規制	20.60 (4.21)	21.23 (4.51)	-0.78	n.s.
自然への関心	21.30 (5.40)	21.94 (5.70)	-0.67	n.s.
真面目勤勉	23.00 (6.08)	24.04 (5.12)	-0.96	n.s.
思いやり	22.49 (5.09)	23.23 (5.07)	-0.73	n.s.
日常的行動	20.77 (4.33)	21.70 (4.54)	-1.20	n.s.
身体的耐性	21.19 (4.83)	22.13 (4.99)	-0.97	n.s.
野外生活技能	19.94 (4.73)	20.91 (4.02)	-1.31	n.s.

表 11. N-SAG の IKR14項目 キャンプ前後比較

N-SAG	Pre M (SD)	Post M (SD)	t-value	
非依存	18.60 (3.23)	20.15 (4.16)	-3.99	***
積極性	20.21 (3.96)	21.04 (4.28)	-2.14	*
明朗性	19.24 (4.08)	19.96 (4.28)	-1.66	†
交友・協調	19.38 (4.20)	20.50 (4.21)	-2.74	**
現実肯定	21.67 (4.86)	22.56 (5.04)	-1.65	
視野・判断	18.93 (3.65)	19.92 (4.22)	-2.74	**
適応行動	21.13 (4.41)	21.99 (4.60)	-1.93	†
自己規制	19.22 (4.11)	19.89 (3.89)	-1.80	†
自然への関心	20.24 (3.84)	20.42 (4.12)	-0.41	
真面目勤勉	21.65 (4.78)	22.55 (4.98)	-1.62	
思いやり	21.11 (3.82)	21.39 (4.65)	-0.55	
日常的行動	19.39 (4.43)	20.66 (4.56)	-2.70	**
身体的耐性	20.20 (4.33)	20.97 (4.50)	-1.81	†
野外生活技能	18.61 (4.37)	19.79 (4.04)	-2.90	

***p<.001,**p<.01,*p<.05,†p<.1

「視野・判断」(t=-2.74; p<.01)、「日常的行動」(t=-2.70; p<.01) に有意な向上が認められ、「明朗性」(t=-1.66; p<.1)、「適応行動」(t=-1.93; p<.1)、「自己規制」(t=-1.80; p<.1)、「身体的耐性」(t=-1.81; p<.1) に有意な向上傾向が認められた(表 11.)。

H-SAG と N-SAG のキャンプ前後の IKR14項目に関して、キャンプ前後における変化を比較したところ、H-SAG に関して有意な向上が認められず、N-SAG に関しては、5項目について有意な向上が、また4項目について有意傾向の向上が認められたことは、一般的な社会人基礎力を持つと考える対象者には、本キャンプによる向上効果が見られるものと考えた。しかし、キャンプ後の IKR14項目について、H-SAG と N-SAG の得点を比較したところ、全ての項目で H-SAG が上回る結果を示しており、キャンプ経験による N-SAG の IKR 得点の向上は認められるものの、キャンプ前に示された「H-SAGの方がN-SAGと比べ高い」との結果を消失させるまでには至らないとの結果を示した(表 9.)。

これらの内容より、1)社会人基礎力が高いと自己評価する者の社会人基礎力は実際高い傾向を示し、それらは、日常生活における何らかの影響、特に参加者の特性を考えるならば、部活動の影響が社会人基礎能力を高めることにつながっている可能性があるのではないかと考えられた 2)ストレスに対するコーピングスタイルの変化から「気晴らし要素の向上」が認められたことから、これら対象者に対する教育キャンプとしては心身へ

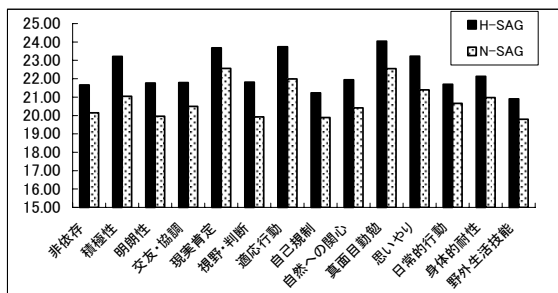


図 9. キャンプ後の H-SAG と N-SAG の IKR14項目得点比較

のストレス強度が低く、冒険的要素が低いものと考えられた 3)社会人基礎力の自己評価傾向が全国平均に近い対象者はキャンプ経験による、IKR項目得点の向上傾向が認められ、現状3年次にキャンプ実習は設定されているが、2年次以前の早期に実施する方が、学業・部活ともに良い影響を与えるものとする 以上、3点の結果が得られた。

4.2.3. 自己成長性尺度項目の比較検討

キャンプ事前調査における、自己成長性尺度項目の違いを H-SAG と N-SAG に分けて示す(表 12.)。この時、H-SAG は N-SAG と比べ、「達成動機」(t=2.07; p<.05)、「努力主義」(t=3.45; p<.01)、「自信・自己受容」(t=3.23; p<.01) について有意な高さが示された一方で、「他者のまなざし意識」については有意に低い傾向が示された(t=-1.93; p<.1)。ここでは、H-SAG の特性として、他者からの目を気にせず、自信を持ち目的達成に向けて努力する特性が示されているものとする。

次に、キャンプ前後の自己成長性尺度項目の変化を H-SAG と N-SAG に分けて検討する。まず、H-SAG に関しては、「達成動機」(t=-2.41; p<.05)、「努力主義」(t=-2.59; p<.05) の項目に有意な向上が認められた(表 13.)。一方で、N-SAG については、「努力主義」(t=-2.56; p<.05) に有意な向上が認められたが、「自信・自己受容」(t=2.04;

表-12. H-SAG と N-SAG の自己成長性尺度 項目比較

	H-SAG M (SD) N=47	N-SAG M (SD) N=96	t-value
達成動機	29.47 (4.16)	27.96 (4.07)	2.07 *
努力主義	31.60 (3.19)	29.63 (3.23)	3.45 **
自信・自己受容	24.34 (3.15)	22.28 (4.34)	3.23 **
他者のまなざし意識	25.21 (4.08)	26.74 (4.59)	-1.93 †

**p<.01, *p<.05, †p<.1

表-13. H-SAG の自己成長性尺度 キャンプ前後比較

H-SAG	PRE M (SD)	POST M (SD)	t-value
達成動機	29.47 (4.16)	30.64 (4.14)	-2.41 *
努力主義	31.60 (3.19)	32.81 (3.72)	-2.59 *
自信・自己受容	24.34 (3.15)	23.68 (4.35)	-1.36
他者のまなざし意識	25.21 (4.08)	25.19 (4.97)	0.04

*p<.05

表-14. N-SAG の自己成長性尺度 キャンプ前後比較

N-SAG	PRE	POST	t-value
	M (SD)	M (SD)	
達成動機	27.96 (4.07)	27.98 (4.33)	-0.06
努力主義	29.63 (3.23)	30.50 (3.83)	-2.56 *
自信・自己受容	22.28 (4.34)	21.56 (4.50)	2.04 *
他者のまなざし意識	26.74 (4.59)	26.76 (5.00)	-0.07

*p<.05

p<.05) に有意な低下が認められた (表 14.)。

この結果に関して、IKR の項目でも考察したように、プログラムにおけるストレス強度設定が弱かった影響も考えられるが、先行研究では、キャンププログラムにおける「ふりかえり」活動が、自己認識を深める効果につながっていることも示されている¹⁹⁾。今回のキャンプ実習においては、班担当のカウンセラーを配置せず、グループメンバーから班長を選出させ、グループカウンセラーの役割を担わせたことにより、グループにおけるファシリテート機能が上手く働かなかったことの影響も考えられ、「ふりかえり」活動が上手く機能しなかったことの影響も考えられる。

5. 結 語

大学教育で養成が求められる「社会人基礎力」を包括的に検証するため、「ストレスコーピング尺度」と、野外教育分野で用いられてきた「生きる力尺度」と「自己成長性尺度」を用いて、キャンプ実習実施前後での変化を検証してきた。その結果として

- 1) ストレスに対するコーピングスタイルとして、より積極的関与方向に向かう傾向が示された。
- 2) 生きる力14項目の内、10項目において有意な上昇傾向が認められた。
- 3) 自己成長性尺度において、努力主義に向かう傾向が示された
- 4) 自己成長性尺度において、自信・自己受容が低下傾向を示した

次に、直接的に、社会人基礎力を定義された12項目別に、「力がある (自信がある)」「力がない (自信がない)」と、それぞれ自己評価させた結果、

全国平均の比較からも

- 5) 対象者の内46名 (32.2%) が自身の社会人基礎力は高いと認識している傾向を示した

その後、これら、46名を H-SAG とし他の対象者を N-SAG と 2 群に分けて、各種尺度の比較検討を行った結果

- 6) H-SAG は N-SAG と比較して、キャンプ前の調査から積極的なストレスコーピングスタイルを持ち、その傾向はキャンプ後により強まる傾向を示した。そして、N-SAG はキャンプ後そのコーピングスタイルは積極的な方向に変化する傾向を示した
- 7) H-SAG は N-SAG と比較して生きる力尺度においても、14項目中 9 項目で有意に高い傾向が認められた。H-SAG はキャンプ後に生きる力尺度の変化は認められなかったが、N-SAG はキャンプ後、14項目中 9 項目で有意な向上傾向が認められ、N-SAG が H-SAG の特性に近づいた。
- 8) 自己成長性尺度においても、キャンプ前調査結果から H-SAG は N-SAG と比較して有意に高く、ポジティブな自己概念を持っている傾向が示された。H-SAG についてはキャンプ後、「達成動機」「努力主義」により向かう傾向が示された、N-SAG については、「努力主義」に向かうが、「自信・自己受容」は低下を示す結果が示された

と、以上 8 点の知見を得た。

「社会人基礎力がある」と自己評価する対象者に対し、自己評価の甘さを感じマイナスイメージで捉えていたが、今回用いた尺度の結果から、実際彼らにそれら能力の存在が示される結果となった。対象者はスポーツを専門とする学生達であり、彼らの日常的スポーツとの関わりの中で社会人基礎力養成につながる経験があるものと解釈した。

また、研究的側面ではなく、今後のキャンプ実習プログラムの運営、企画立案につなげる意味で、コーピングスタイルに対する分析結果からキャンプにおいて気晴らし要素の向上が認められたキャンプの効果は、社会人基礎力を一般的水準で

評価する群に認められる傾向が強い 自己成長性尺度において「自信・自己受容」項目が低下した結果を解釈し

- 1) キャンプ実習における心身へのストレス強度が低く、冒険的要素が少ない
- 2) 3年次対象よりも2年次以前に実習として設定することが教育的効果の高まりにつながる
- 3) キャンプ中のふりかえり活動を徹底させ、自己を見つめる機会につなげることを、キャンププログラムに反映させたいと考える。

本来の研究目的として、社会人基礎力を包括的に捉え、その要素を具体化させる事を目指し論文を進めてきた。実際、既存の尺度を用い、再度分解し統合させるなどの因子分析の作業も行ってきたが、納得できる結果に至らなかった。また、野外教育分野での一般的研究手法である、キャンプ前後のみでなく、1ヵ月後の効果の継続性に関する調査も試みたが回収率が低く、今回の研究ではキャンプ前後の比較に留めた。以上2点を今後の研究課題としたい。産官学連携による社会人基礎力養成の具体的カリキュラムも19年度より7大学10学部で実施されており²⁰⁾、今後、本学において野外教育を用いた社会人基礎力養成プログラムの立案を目指し、実践研究を進めていきたいと考える。

参考文献

- 1) <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kenkyukai.htm>. Accessed December 7, 2007.
- 2) 「社会人基礎力に関する研究会」中間とりまとめ、経済産業省、社会人基礎力に関する研究会、2006
- 3) 川村協平、橋直隆、星野敏男、西田明子：組織キャンプが自己概念の変化に及ぼす影響、山梨大学教育学部研究報告、31、147-152. 1980
- 4) 影山義光、飯田稔：大学キャンプ女子参加者に対する因子分析を用いた自己概念の変容、筑波大学体育科学系紀要、11、139-144. 1988
- 5) 遠藤浩、北谷崇：大学キャンプ実習の効果に関する研究 - 自己概念と自己実現の変化から -、野外運動研究、7、9-16、1994
- 6) 築山泰典、遠藤浩：キャンプ実習が大学生の性格特性に及ぼす影響、日本野外教育学会第3回大会研究発表抄録集、62-63、2000
- 7) 遠藤浩、築山泰典：大学キャンプ実習が参加者のタイプA特性に及ぼす影響、野外教育研究第7巻1号、34-37、2003
- 8) 築山泰典：キャンプのものさし、12-15、社)日本キャンプ協会、2006
- 9) 西田順一、橋本公雄、徳永幹雄：児童の組織キャンプ経験がストレス反応に及ぼす影響——認知的評価との関連から——、健康科学、九州大学健康科学センター、第22巻、151 - 157、2000
- 10) 中川もも、岡村泰斗、荒木恵理：組織キャンプのストレス場面におけるソーシャル・サポートが小中学生の対処行動に及ぼす影響、野外教育研究第9巻2号、19-30、2006
- 11) 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会、教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ、21-29、2007
- 12) 橋直隆、平野吉直：生きる力を構成する指標、野外教育研究第4巻2号、11-16、2001
- 13) 橋直隆、平野吉直、関根章文：長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響、野外教育研究、第6巻2号、2003
- 14) 財)パブリックヘルスリサーチセンター、ストレススケールガイドブック、p391-394、実務教育出版、2005
- 15) 梶田叡一：自己意識の心理学第2版、東京大学出版、1988
- 16) 梶田叡一：まなざしのダイナミクス、梶田叡一編、自己と言う意識、現代のエスプリ、72-82、1993
- 17) 小杉正太郎編著、ストレス心理学、p45-48、川島書店、2005
- 18) 社会人基礎力に関する緊急調査、経済産業省、2006

- 19) 荒木恵理、岡村泰斗、濱谷弘志：冒険キャンプにおけるふりかえり活動が参加者の学習効果に及ぼす影響、野外教育研究第11巻1号、

37-50、2007

- 20) http://www.meti.go.jp/press/20070628001/190627_02.pdf. Accessed December 7,2007.

(平成20年3月17日受理)